

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究
基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」

International Workshop

Agricultural Practice and Social Dynamics in Niger

日時：2017年3月12日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディア・セミナー室（306室）

参加者：5名(うち外国人2名)

プログラム：

14:00-14:30 Jan Patrick Heiss (University of Zurich),

Some reflections on the relationship between magic/religion and field-cultivation in South Central Niger

14:30-15:00 Yuichi Sekiya (University of Tokyo),

Comparative study on African rural development, Niger, Kenya and Malawi: An analysis focusing on Nigerien case

15:00-15:15 Coffee break

15:15-15:45 Shuichi Oyama(Kyoto University),

Hausa basic thought of the movement "harukuki" and population explosion in Niger

15:45-16:15 Yutaka Sakuma (Tokyo University of Foreign Studies),

Present of Sudanese agricultural complex: The case of western Niger

16:15-16:30 Coffee break

16:30-17:00 Aggée Céléstin Lomo Myazhiom (University of Strasbourg)

Total comment

17:00-18:00 Discussion

【内容】

はじめに大山修一氏（京都大学）から本研究会についての趣旨説明があり、来日したジャン・パトリック・ハイス氏（チューリッヒ大学）を囲む形で、数少ない日本のニジェール研究者が一堂に会する本研究会の意義が確認された。

つぎにハイス氏が“Some reflections on the relationship between magic/religion and field-cultivation in South Central Niger”というタイトルの下で報告を行った（当初は“Traces of history in current field-cultivation practices in South Central Niger”という

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

報告が予定されていたが変更となった)。現地における直接観察や聞き取り調査から得られた資料に基づきつつ、ニジェール南西部の農業にイスラームや在来の呪術的实践がいかなる影響を及ぼしているかという点を考察した。他の参加者からは、かならずしも表立っては行われない呪術实践の多様なあり方や、イスラームに基づく集団的实践、また “patience” と “confidence” という倫理規範と農業労働の関連などをめぐり質問や意見が提出された。

第2に、関谷雄一氏（東京大学）が “Comparative study on African rural development, Niger, Kenya and Malawi: An analysis focusing on Nigerien case” というタイトルの下での報告を行った。青年海外協力隊などの開発援助組織の一員として、文字通り「実践」的かつ「動態」的に農村社会と関わってきた経験をもつ報告者は、ニジェールにおける植林プロジェクトの成功例を、ケニアおよびマラウィの事例とあわせて考察し、大規模な農村開発ではなく小規模な農業活動を協働的に支援することの重要性を論じた。他の参加者からは、ニジェールにおける植林事業と国際的なアフリカ・グリーンベルト造成事業との関連や、開発事業の現場における住民参加のプロセス、住民間の不均衡な権力関係や民族的な差異が開発事業に及ぼす影響について質問や意見が提出された。

第3に、大山氏が “Hausa basic thought of the movement "harukuki" and population explosion in Niger” というタイトルの下での報告を行った。辞書的には “movement” や “news” などと解されるハウサ圏固有の概念 “harukuki” に着目し、ニジェール農村部で深刻化しつつある人口増加のひとつの背景に、出産や複婚を “harukuki” の増大として肯定する一夫多妻制父系大家族の理念がある点を指摘した。他の参加者からは、“harukuki” の多義性や、この概念とアフリカ各地に認められる生命観との関連などをめぐり質問や意見が提出された。

第4に、佐久間寛（AA研）が “Present of Sudanese agricultural complex: The case of western Niger” というタイトルの下での報告を行った。中尾佐助の農耕文化論を手がかりとして、犁耕と灌漑稲作の導入という近年ニジェール西部の農業に生じた変化を考察し、こうした変化の背景に、除草をめぐるニジェール西部ソンガイ系社会に固有のモラルがあった可能性を論じた。他の参加者からは、アフリカの耨耕と犁耕に関する Jack Goody らの古典的議論との整合性や、ニジェール東部ハウサ語圏との相違などをめぐり質問や意見が提出された。

最後に、アジェ・セレストン・ロモ・ミヤジオム氏（ストラスブール大学、AA研客員研究員）が、非ニジェール研究者の立場から総合コメントを行った。“ancestrality” や “development” という観点から4報告を横断的に分析し、本研究会がもつ、一地域研究の枠組みにとどまらない包括的かつ学際的な意義を指摘した。コメントをふまえて参加者全員による活発な討論が行われ、予定の時間を30分超過しての閉会となった。

閉会后、本研究会の成果は、本年度中を目処にAA研『アジア・アフリカ言語文化研究』に特集として投稿することについての申し合わせがなされた。

（文責：佐久間寛）